

海外における待遇表現教育の問題点

—台湾での研修会における「事前課題」分析・番外編—

川口 義一

キーワード

待遇表現・敬語・待遇表現指導・台湾における日本語教育・母語話者教師

0. はじめに

本稿は、拙稿「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析(1)—」(『紀要』15号・2002・早稲田大学日本語研究教育センター)、「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析(2)—」(『講座日本語教育』第38分冊・2002・早稲田大学日本語研究教育センター)および「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析(3)—」(『紀要』16号・2003・早稲田大学日本語研究教育センター)の「番外編」である。「番外編」である理由は、前3編が研修会参加教師のうち、日本語非母語話者である台湾人教師による「事前課題」の記述内容を分析した論文だったのに対し、本稿は同じ研修会に参加した日本人教師の記述内容を取り扱うものだからである。同研修会に参加した日本語母語話者の日本人教師は、あまり多くなく、3会場合わせて総計10名(男性6名・女性4名/高雄7名・台中1名・台北2名)であった。そのため、台湾在住の日本人教師の意見が広くデータの中に現われているとは言いがたい。そこで、本稿を、前3編の続編とはせずに「番外編」とした次第である。

前3編では、「事前課題」の記述内容を、本稿の筆者の判断で「1. 日本語の待遇表現に関する話題」「2. 台湾人学習者の日本語待遇表現使用・意識に関する話題」「3. 待遇表現指導上の問題に関する話題」と分けて章立てし、さらに各章の中を、それぞれ2~4の小節に分類して議論した。本稿では、データの量がさほど多くないこともあり、大きな章立てはこのままにして、内部を小節に細分類しないで議論する。それでも、前3編と同じく、複数の章に属する内容の問題があることは認めざるを得ない。しかし、それらをすべて関係ある章に入れてそのつと論ずるのも繰り返しになるので、本稿の筆者の判断のみですべての記述内容を上述の1~3に分け入れた。ただ、議論を進めるうえで程度似通った問題と見られる内容のものは、ひとまとめにして取り上げた。

また、前3編では紙幅の関係で省略した、本稿の筆者の、研修会参加者に対するコメン

ト・回答を、本稿では一部省略するなどして可能なかぎり収録した。このコメント・回答は、台湾人教師の記述に対しても一人ずつ行い、研修会での講座内容を決定するための参考にしたばかりでなく、研修会終了後、主催者団体の「交流協会」を通じて、参加者全員に郵送・通信した。今回、そのうちの日本人参加者に宛てたものを公開することによって、「事前課題」の分析結果がどのようにフィードバックされたかを読者の参考に供したい。

1. 日本語の待遇表現に関する話題

日本人講師の「事前課題」に質問の形で書かれたものの中で一番多かったのが、日本語の待遇表現についてのものである。台湾人教師の質問も、この項目に関するものももっとも多かった。非母語話者のみでなく、母語話者の日本語教師でも、待遇表現については「自信がない」「こんな使い方は間違いではと思うが分からない」などという記述が目につく。まず、具体的な表現のいちいちについては、次のような質問*が出ていた。

「お疲れ様」と「ご苦労様」の違いは？前者は目上に使ってもよいようだが（高・高）*／「～しておあげになってください」という言い方を聞いたことがある。非常に耳障りなのだが、何がおかしいのか（北・中/補）／目上の人に「お怒りになるのも無理はございません」というのは誤りか（北・中/補）

これらについては、それぞれ、次のように回答をしたので、引用する。

- ◇ 「お疲れ様」は同じ労苦を共有したという感情の下に使われます。海外から帰国する団体観光客が、搭乗機が成田に着いたとたんにお互いに「お疲れ様」を連発するようなのはこのためです。したがって、一種の「連帯感の表明」なので目上の人に使われることもあります。もちろん、目上の人と「同じ労苦を共有した」ことを表現するのが憚られるという発想から、この表現は目上に使えないとする世代がいるのも事実です。一方、「ご苦労様」は「連帯感の表明」ではなく、あくまでも相手の行動に対する「評価とねぎらい」ですから、しはらくは目上への使用へ拡大することはなさそうです。
- ◇ 「～しておあげになってください」が耳障りなのは、その語形にあります。オアゲニナルという形だと動詞はアゲルですが、誰から誰にアゲルかがはっきりしないと、誰の立場でものを言っているのか分からないということです。「表現者」を「自分」、「表現の受容者」を「相手」、「相手の行為の受容者」を「第三者」とすると、この言い方では「相手」は「自分」より「高い」人だと言えますが、～テアゲルを使っているからには、「相手」は「第三者」より「高い」ということになって、「第三者」と「自分」との関係がわからなくなってしまいます。「第三者」が身内ならば「～していただけませんか」で済みます。「自分」よりも「相手」よりも目上ならば～テサシアゲルを使って「～てさしあげてください」と言ったほうがいいですが、それでもアゲル系の動詞を使うことになるのは、「第三者」に恩恵を与えることを示してしまうので、リスクを伴う言い方です。それ以外の関係の場合は、アゲル系の動詞を使わず、「～てごらんになってはどうでしょうか」とあくまで「相手」に対する尊敬語使用だけでとどめておくのが賢いやり方です。つまり、アゲル系表現はそのままにして別の表現にしてみると言われるとそう簡単に

はいかないのです。「第三者は待遇の外に置く」というような方略がいちばん安全だということを感じておいてください。

- ◇もし「相手」が「自分」より相当「高い」人だったら、私の選ぶ表現は、「お腹立ちもごもっともです」です。もし、「お怒り」の人が「第三者」で、しかも「相手」側の人でなかったら、このままでもいいのではないのでしょうか。ただし、その場合も「相手」が相当「高い」人だったら、「無理はございません」よりも「無理はなかるうかと存じます」くらいのほうがきれいですね。

個々の具体的な表現についてではなく、「こんなときにどういう言い方ができるか」というタイプの次のような質問も多い。

目の前にいる部長に対して社長のことを話すのに、その社長をあまり高めると部長の不興を買うというようなことがある。そのことを教えるべきか（北・補）／恩師や指導教授が聴衆の中にいるとき、その先生方の著作物をどう紹介するか。「1999年の川口先生の論文」のように言うのか（高・高）／大学では、ソトからの電話に出てウチの教員について話すとき、自分より先輩の教員でもウチ扱いで、呼び捨てでいいのか（高・高）／目上の人のベットについて話すときに、尊敬語は使うのか（北・補）

最初の質問は、いわゆる「敬語回避」に関するものである。問題意識は確かだが、例がよくないので、そのまま学生に説明すると誤解される恐れがある。そこで、次のように解説して回答した。

- ◇ご指摘の現象は、目の前の部長に配慮して社長への配慮を控えめに表すということで、「敬語回避」と呼ばれているものの一種です。しかし、同じ会社の部長と社長の間のことだったら、あまりいい例ではありません。「敬語回避」は、大学の自分の指導教授に高校の担任教諭の話をするときに、高校教諭を非常に高く待遇して話すことを避けるというようなときに、より明白に現れます。つまり、大学の先生に向かって「私の高校の担任の先生は、たいへん聡明なお方でしたっしょって…」というような話し方はせず、少なくとも「…聡明な方で…」くらいで抑えるだろうということです。このような知識は待遇表現の使用上必要ですから、上級ならクラスで教えたほうがいいでしょう。

2番目と3番目の質問は、同一の大学教師から出た。若い教師だったので、実際にどうすればよいか迷った経験があるのかもしれない。それぞれへの回答を以下に示す。

- ◇先行研究の引用は、「川口（1999）」のような形式で行うのが一般的です。これだと、引用した論文の著者である先生が目前にいても、名前をそのまま呼び捨てにすることができます。このような扱い方を、「脱待遇」と呼びます。客観的な議論を人間関係の表明に優先させるというわけです。
- ◇大学は、企業と違い、独立した専門家の集団ですから、敬称抜きで呼び捨てにすることは難しいです。しかし、こちら側の人物として「先生」で呼ぶのが憚られること（公開講座での講師

紹介等)もあります。私の周囲では、「教育学部の～教授/助教授/助手」のように職位名でよぶことで、「先生」呼びを避けています。事務方の場合にも「教務部の～事務長/主任/職員」と職階名を使います。

人物でないもの、特にペットの動物などについてどのように表現すれば、その所有者に対しての配慮を示せるかなどは、日本語母語話者でも迷うことがある。その場合、問題を「狹義の敬語」の使い方に矮小化してしまわないほうがよい。

- ◇「目上の人に属するもの」の待遇の仕方を、いわゆる尊敬語だけでやろうとするのは、間違いです。社長のペットの犬だったら、「社長のところのワンちゃん」と言うだけでずっと配慮がある言い方になります。もし犬の名前を知っていれば、「社長のお宅のリリーちゃん」のように言えばいいでしょう。ただし、雄の大型犬だとチャンは使いにくく、「社長のお宅のジョンが病気で」くらいで十分でしょう。どちらも、社長に向かって話すときも、社長について話すときも使えます。

中国語との対照や方言の敬語についてのコメントもあった。続けて、それぞれに対する回答とともに紹介する。

中国語の「喫飯了、没有？」のような表現を日本語でどう言うかと聞かれて困ったことがある。「こんにちは」では、感じが出ない(高・高) / 大阪に住んでいたときに～ハル敬語の使い方に悩んだ(北・中/補)

- ◇ 適当な表現がなければ何も言えないので、だまっているしかありません。中国語で「いただきます」や「ごちそうさま」を言いたくても同じ表現がない(“喫飽了!”は「ごちそうさま」と同じではありません)ので、何も言えないのと同じです。また、何か表現を見つけて言ったとしてもしるべき応答(「おそまつさまでした」など)が帰ってきません。学生さんには、前述の「いただきます」「ごちそうさま」の例などを使って、ことばがないときは無理に何か言おうとするなとしか指導できません。
- ◇ 大阪弁の～ハルを使った尊敬語は、共通語の尊敬語よりも敬度の幅が広く、親しげな敬意から高度な敬意までカバーできます。身内に使うこともある(自分の夫について「うちのヒト、そっち行ってはる?」と言うなど)のも、共通語と違うところです。とにかく、大阪方言と東京方言ベースの共通語は別の言語ですので、使い方に悩んでいないで、外国語だと思って学習したほうがよかったですね。

最後に、母語話者の敬語習得に関わる質問とそれに対する回答を紹介する。

私は、会社勤務の中でウチ・ソトの別を含む人間関係と敬語の関連を学んでいった。日本語教師は、敬語を教えるためにサラリーマン経験があったほうがいいのか(高・高)

- ◇ サラリーマン勤務中の敬語習得は、大体がご経験のようなものです。しかし、日本語教師とし

ては、サラリーマン経験の有無は別として、現象としての敬語の実態を観察し、収集し、かつ分析する力量が問われます。いろいろな職種・世代の人たちからデータを取れるように気を付けているべきですね。

以上、日本語母語話者でも、待遇表現のさまざまな側面の人に聞かなければならないところがあるのが分かる。社会各層での待遇表現の実態を常に把握し、「狭義の敬語」に捉われずそれを分析できる枠組みを持つということは、第一言語といえども自然習得だけでできることではない。教師養成や再研修における待遇表現への意識化の必要性が感じられる。

2. 台湾人学習者の日本語待遇表現使用・意識に関する話題

台湾人学習者の待遇表現の誤用や誤ったあるいは偏った知識についてコメントしたものを以下に紹介する。これらの記述には、「そこでどのように教えたら」という教師側の意識が感じられるので、そのまま「3. 待遇表現指導上の問題に関する話題」へも分類されるかもしれない。本稿の筆者の回答も、教え方に言及しているところがある。どちらにせよ、ネイティブ教師にとっては気になるところではある。

「事前課題」のデータには、まず「学習者が敬語を使わない／使えない」という、次のような内容の記述がある。二人の異なる教師の記述であるが、どちらも飲食に関する基本的な敬語についての問題である。

教師に食べ物や飲み物を勧めるときに「先生、食べますか／飲みますか」「先生、欲しいですか」などと言い、召し上ガルやオ飲ミニナルなどを使わない（高・高）／初対面の日本人に食べ物を勧めるときも、「これ、食べますか」と言うばかりで、「召し上がりますか」が出てこない（高・高）

これらの記述は、教師の問題意識が「あれかこれか」という語彙・語句のレベルに留まっていて、問題の本質が見えていないことを表わしている。したがって、このような問題に対するコメントは、それぞれ次のように談話レベルの問題を意識化させるものとなる。

- ◇「先生、食べますか／飲みますか」のほうは、それほど問題ではありませんが、「先生、欲しいですか」のほうは大きな問題です。こちらを、注意深く訂正する必要があります。というのは、日本語では目上の人に、「欲求」のような個人的感情に関する質問を直接するのは配慮を欠くことだと考えられることが多いからです。しかし、「直接に欲求を聞くか聞かないか」というのは文化の問題で、「欲求を直接聞かない」ということは、もしかしたら台湾人には理解に少し時間がかかることかもしれません。一方、尊敬語・謙譲語などは、クラス担任のようにいつも顔をあわせている教師に対して一対一の個人的な会話で使う必要はそれほどなく、むしろ大勢の人を前にしたフォーマルな状況で使えるようになることが必要です。（以下、省略）
- ◇「これ、食べますか」の問題は、「食べますか」か「召し上がりますか」かの問題ではなく、何か食べさせようとしているのになぜそれを与えるのか説明しないこと、および「食ベル」とい

う動物的な概念をそのまま使うことにあります。初対面の人に対してなら、「あの、ちょっと、失礼します。これ、このあたりの名物で〜というお菓子なんですが、とてもおいしいんです。一ついかがですか」というように勧めれば「食ベル」をどう言うかは問題でなくなります。このような工夫をすることこそが待遇表現を学ぶということなのです。敬語ばかりの待遇表現指導から脱却するように心がけてください。

次に、「こういう間違いをするのだがどう考えたら／指導・説明したらいいか」という問題についての記述が見られる。まず、表現の使い分けに関する次のような記述である。

「宿題の提出を明日に延ばす」というお願いの文を作らせると「先生、宿題をあした出してもいいですか」と書いてくる学生が多いが、「先生、宿題を明日まで待っていただけませんか」という、より丁寧な発想の表現は難しいのだろうか（高・高）／「あした出してもいいですか」と言うべきところを「あした宿題を出していただけませんか」と言う学生が、何人かいるのだが（高・高）／「先生はこれ食べますか」とか「先生、教えてあげます」のような表現が出てこないようにしたい（高・高）

最初の記述からは、談話レベルの待遇表現に対する意識の欠如が見られる。これに対する回答も、したがって、談話レベルの表現展開について言及することになる。

◇ ご指摘の「無理なお願い」を丁寧にするための発想は、「出してもいいですか」を使わないで、「待っていただけませんか」を使えというだけでは解決されないでしょう。というのは、そもそも「前置き」「事情説明」をせずに、いきなり依頼してくるところが問題なのです。このような相手に負担を強いる依頼には、より丁寧度の高い語形を示すだけでなく、「無理なお願い」のための適切な談話構成を示して教えると効果的です。次のような会話モデルを示しながら、無理なことを頼むときには相手の反応を見ながら、一つずつの手順を踏んで依頼していくことを教えるとよいと思います。（「会話モデル」～省略）なお、談話の構成がしっかりしていれば、「出してもいいですか」で依頼してもだいじょうぶです。ただし、「出してもよろしいでしょうか」という形式を使わせましょう。このような「許可求め」の表現にするほうが「依頼」の表現にするより丁寧になります。

2番目・3番目の記述については、どちらも、表現が基本的に意味するところをとらえていないと、理解できないし指導もできないところから、次のように回答した。

◇ 「あした宿題を出していただけませんか」は誤りですが、ここで「出させていただけませんか／ないでしょうか」を教えてもうまくいかないと思いますので、「出してもよろしいでしょうか」のほうを教えます。「～していただけませんか」は「依頼」、「～てもよろしいでしょうか」は「許可求め」であること、つまり「依頼」は【行動：相手】、「許可求め」は【行動：自分】であることを理解させれば、お願いすることの内容（「宿題の提出」をするのはだれか）から考えて、混同は起こらなくなります。

◇ お挙げになった例は、誤りの深刻さが異なります。「先生はこれ食べますか」のほうは、クラス

担任のような親しい教師相手ならそれほど問題がありませんが、「教えてあげます」は「不当な恩恵感」が出るので、非常に問題です。「～あげる」はただ物が移動するだけではなく、移動元が移動先に恩恵をあたえるということを明言してしまうことになるということをしかりと教えなければなりません。つまり、「私が先生に～てあげる」と先生に向かって言うのは、「先生、アナタは～する力がないけど、私はあるんです。だから、～てあげるから、ありがたいと思って感謝しなさい」ということになります。このように説明すれば、欧米人にもこの表現が目上向きでないことがすぐに分かります。

次に、テレビドラマなどを通じて生の日本語が入ってきやすい台湾ならではの文化背景もうかがえる、スピーチ・スタイルの問題についての記述^{*)}を紹介する。はじめの二つは、同一の教師からのものである。

日本のテレビドラマでは、ダ体で話すことのほうが多いから、丁寧なデスマス体だけを勉強していると日本で会話ができなくなるのではないかと心配する学生をどうやって説得すればいいか(中・補) / 毎年、目上の人と親しく話すために「普通体」を勉強したいと言い出す学生が出るのが、特別に「普通体」練習の時間を作るべきか(中・補) / 日本にいたとき子供に「ここで遊んではいけません。あぶないですから」とデスマス体で話しかけて、「変な日本語」と笑われたことがあるという学生が、丁寧すぎて子供に笑われないように、ダ体の会話も教えたほうがいいのではないかと主張する(北・中/補)

これらの問題は、待遇表現教育の根幹に関わる大きな問題なので、友人や家族に向かったのスピーチ・スタイルを「普通体」「常体」などと名づけることの不都合、ダ体指導の問題点なども含めて、それぞれ次のように解説して回答とした。

- ◇ 日本のテレビドラマでダ体が多いのは、恋人同士や家庭内の話が多いせいです。すべての場面でダ体が一貫しているわけではないので、一度デスマス体も使われているドラマをとってきて、どこでスピーチ・スタイルが変わっているかクラスで見るといいでしょう。最近、留学生を連れて見学に行った東京都のある小学校では、交流会の司会役をした小学校6年生の女の子が尊敬語・謙譲語・丁寧語を使ったデスマス文体であいさつをしてくれました。ダ体が「普通」だと思っている学生さんには、「大学生のくせに日本の小学生ができることもできないのは恥ずかしいか」と言ってください。
- ◇ 「普通体」という呼び方自体が実は不適切です。日本語の待遇表現で「普通」なのは、尊敬語や謙譲語を使わないデスマス体です。いわゆる「普通体」、すなわちダ体の話し方はタメ口であり、ぞんざいな話しかたです。タメ口で話して「ポライト」になるのは、親しい友人同士であって、いかに親しくとも教師と学生の間でタメ口で話すのは不自然です。(中略) そのかわり、デスマス体でも親しみを表せる方法を教えるといいでしょう。それは、縮約形を多用すること^{**)}です。例えば「先生、陳さんが宿題を忘れてしまったので、今日は休むと言っていました」というのを「先生、陳さん、宿題忘れちゃったから、今日休むって言っていました」というように言うことです。「ので」が「から」に替わっていることとか格助詞が落ちていることなどにも気をつけてください。これで、さらに、男性の学生には「…休むって言ってたんすけど」のよう

な、「～っス体」とでも言うべき文体を教えれば、「テスマスのままで親しげに話す」方法が完成します。日本語のスピーチ・スタイルは、デスマス体とダ体の二分法のみでないことを学生さんたちに理解させてください。

- ◇ 日本に言ったときに笑われるからと言って、子供向きのダ体表現を教えなくてはいけないかという、そうとは思いません。というのは、だいたいダ体会話自体が非常に難しいものだからです。「ちゃんとしたダ体」を話すためには、文末からデス・マスは必ずだけでは済まず、格助詞の省略の原理、終助詞のネとヨの使い分け、音の縮約・融合などいろいろ複雑なことを習得する必要があり、時間がかかります。それより、「大人に笑われない」しっかりした敬語表現を身につけるほうが先ではないでしょうか。大事なのは、子供向きの話し方ができるかどうかではなく、「子供のスピーチ・スタイルは大人と違う」ということを知識としてきちんと知らせること、子供に話しかけるときは自分が外国人であるとちゃんと言うことです。私は、韓国で暮らしていたときに、子供と話すときは必ず「おじちゃん外国人ですから、話し方は変ですけど許してくださいね」と言ってから話し出し（韓国語で、子供に向かって丁寧体で話すことの奇妙さは日本語の比ではありません）、「…は、子供のことはでなんと云いますか」と一つ一つ聞いて覚えていきました。この方法だと子供はまじめに一つ一つ教えてくれます。ところで、子供に注意したその人は、「～てはいけません」という言い方が変だったのか（「～ちゃめですよ」ならまだまし）、アクセントがおかしかったのか、そもそも注意することがうるさかったのか分かりません。私は、アクセントじゃないかと思います。台湾では、残念なことにアクセントや発音の教育はほとんど無視されていますからね。中国語なまりの強い日本語で「してはいけません」などと言われたら、大人でも笑いたくなります。子どもは我慢しないだけのことです。

以上が「2. 台湾人学習者の日本語待遇表現使用・意識に関する話題」であった。問題意識が談話レベルに届いていないこと、およびスピーチ・スタイルに関する知識が不足しているために学生の疑問・要望にうまく対応できていないことが見えている。このような問題の解決にも、日本語教師の養成や再研修のある段階での集中した「待遇表現意識化」の訓練が必要になってくるものと思われる。

3. 待遇表現指導上の問題に関する話題

最後に「待遇表現指導」についての記述を分析する。前2章で日本人教師の待遇表現についての知識や意識化がさまざまな面で不十分・不徹底であることがうかがえた。このことは、当然指導法の選択・開発などにも影響を与えるものと推察される。事実、「事前課題」の記述は、この推察が的外れでないことを示している。以下、具体的に検討する。

まず、敬語という複雑な表現体系のどこまでを分からせればよいのか、という疑問がいろいろな形で複数出てきている。それぞれに対する回答を、続けて引用する。

「相手や場面に応じて敬語を使い分ける」ということを初級の学生に期待すべきなのだろうか。難しすぎないか（高・高）／待遇表現は、同じことを言うにもいろいろな言い方がある、教えると

きを選択に迷う（高・補）／初級の待遇表現教育で中心にして必ず教えなければいけないのは何だろう（北・中/補）／初級では分煩の仕方も含めて、なかなか敬語が定着しない。どうすればよいか（高・高）

- ◇初級では、「相手や場面に応じて敬語を使い分ける」程度まで学習することを期待すべきではありません。それよりも「典型的な場面」や「決まった言い方」での敬語用法を、少しだけ、しかししっかり覚えさせることが必要です。当方のご紹介した「チャンピオンのスピーチ」¹⁰ができるようになれば、それで十分です。また、教室を出るときに「さようなら」ではなく「失礼します」が使えれば、それはたいしたものです。「先生、プリントください」ではなく「いただけませんか」、「窓を開けてもいいですか」ではなく「開けてもよろしいでしょうか」と言えれば、立派です。このような表現は、教科書の最後のほうまで教えられないことではありません。可能なところでどんどん導入しましょう。
- ◇初級の待遇表現指導で大事なことは、多様な表現を包括的に教えようとしたり、表現間の違いを説明できるようにさせようと思ったりしないことです。それよりも、少数の典型的な表現をきちんと覚えさせることです。研修会でご紹介した「チャンピオンのスピーチ」はそのための工夫です。あれならテストのたびに使えますから、繰り返し同じ表現を言ったり聞いたりできて、記憶に残ります。
- ◇普通の会話ではぜったいにデスマス体を崩さないことを中心にすればいいと思います。これだって、動詞が活用しない中国語の母語話者にはそんなに簡単なことではありません。（中略）それよりも、万人に当然な待遇表現の規則、すなわち「大勢の人の前では丁寧に話す」を意識させ、その練習をしたほうがいいと思います。「チャンピオンのスピーチ」はそのためのものです。
- ◇定着していないものは、再指導するしかありません。初級で定着すると思うべきではないし、定着すべきだと思うのも間違っているのだから、当然中上級での復習と追加の指導が必要です。そのときは、私をご覧にいた「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」「丁寧語」「美化語」（さらに「尊卑語」）の分類に常に言及して、新しい敬語表現が登場するたびに整理するようになさったらよいかと思います。ただ、語句の分類ばかりに気を取られていないで、談話レベルの表現指導もなさるようお勧めします。

教科書やカリキュラムのどのあたりから待遇表現指導を始めたらいいかという、次のような質問も出た。待遇表現を「文型」のように考えているのは指導方法が制限されてしまうので、そのあたりの発想を変えるように促して回答した。

初級から敬語を教えようとしたら、教科書のどのあたりの文型の導入後に始めればよいか（北・中/補）

- ◇待遇表現を初級から取り上げるときには、どこか教科書の特定の課から始めるというように考えないで、どこでもとにかく入れられるところからどんどん入れてしまう、ということで進めてください。「さようなら」を教えたら、すぐに「失礼します」を教え、学生一人一人「先生、失礼します」と言って帰らせるというあたりから、「高め」の待遇表現は始まります。研修会で

ご紹介した「チャンピオンのスピーチ」も「こんにちは」「ありがとうございます」が既習なら、その段階で始められます。

待遇表現指導に欠かせない「自然な使用環境」に関する記述に次のようなものがある。「チャンピオンのスピーチ」や「ビジター・セッション」の有効性について回答で説明した。

会話の中で自然に敬語を身につけさせるには、どのような指導をすればよいか（高・高）／尊敬語や謙譲語を自然に使う環境を教室内で作ることができるか（中・補）／自然な表現を追及してコミュニケーションな教え方をすると正確さが犠牲になると聞くが（高・高）

◇（省略。次の回答参照）

◇台湾において、いやすべての日本以外の国で尊敬語や謙譲語や丁寧語を自然に使える環境というのは、「人前でスピーチをする」ときです。研修会でご紹介した「チャンピオンのスピーチ」はそのことを意識して考案したものです。また、「ビジター・セッション」もそのような環境です。日本人や流暢な日本語を話す台湾人（アメリカ人でもかまいませんが）をゲストに迎えて、質疑応答をするということが高い待遇表現を使う機会を作ります。さらに、「3分間スピーチ」などのコーナーを作って、司会も学生に任せて議論させるのも高いレベルの待遇表現を使う自然な文脈です。

◇発話の正確さがコミュニケーション重視の教育と矛盾せず、むしろ表裏一体であることは、研修会で紹介した「チャンピオンのスピーチ」のビデオを見てもお分かりでしょう。言語形式の学習が重要なテーマのあのような活動では、誤用訂正も「直接訂正」をしてくまわないと思います。そうすれば、学習者に語句レベルだけでなく談話構成に対する意識化[※]を促すことができます。

中国語と日本語の言語としての相違の大きさから、日本語の待遇表現を「特殊で難しいもの」とに認識してしまうのは、非母語話者教師ばかりではない。次のような疑問には、待遇表現の普遍的な性格を指摘して回答とした。

中国語と日本語では、談話レベルの待遇表現に大きな違いがある。例えば依頼するとき日本語は「恐れ入りますが」と恐縮し、中国語では相手の名前を直接呼んでから依頼に入る（高・補）

◇中国語と日本語では談話で使用する表現に違いがあることはそのとおりですが、共通点も多いはず。そちらを意識させることも必要です。例えば、「恐縮表明」であろうと「直接の名前呼び」であろうと、依頼の前には相手の注意を引き、相手の反応を確認して先へ行くのは普通のことです。特に依頼の内容が相手にとって負担であるようなものでは、この「注意喚起」と「相手の反応確認」は必須の手順です。このようなことへの理解は、待遇表現のような普遍性の強い表現の指導にはぜひとも必要です。台湾在住の強みを生かして、中国語と日本語の待遇表現の共通性を調査なさってみてはいかがでしょうか。

最後に、学習者の主体性や文化の相対性を重視する考え方から、待遇表現の指導が「日

本文化の強要」にならないかと恐れている、次のような議論がある。ともに同一の教師からの意見である。

学生は個人によって学習ニーズが異なり、人間関係も異なるのだから、いっせいに同じ敬語を教えるのは個人差無視の「日本文化の強要」にならないか（北・中/補）／家庭や職場の環境によって違う待遇表現の実態を教えさるものではないのでは。友人の地方出身者で、東京に暮らして「関東弁を押し付けられた」と憤っている者がいたが、待遇表現指導も「日本語の押し付け」になるかもしれない（北・中/補）

日本人母語話者の教師が自己を「日本文化・言語のモデル」と考えて「日本人はこうします／日本語ではこう言います」と言い切ってしまうことの危うさは自覚すべきであると思われるが、それが待遇表現教育の軽視や放棄につながらないようにバランスのある考え方をすべきであろう。詳細に議論すべき問題であるが、紙面で手短かにコメントすると、次のようになる。

- ◇学習者のニーズに合わせた待遇表現教育をしようとすると、学生の接触場面の個人カルテを作らなければなりません、それは現実的ではありません。そこで、ある程度だれでも遭遇しそうな場面で最低限必要な基本的な表現を教えておく、というのが妥協可能な方法かと思います。「チャンピオンのスピーチ」はそのためのものです。大勢の人の前で特定の役割を負って話すとき（式典の司会・結婚披露宴での祝辞・就任や退任のあいさつなど）に丁寧になるのは普遍的な言語現象で、英語でさえ「式典の司会」のあいさつや進行のことはたいへんに丁寧です。あいさつ型のスピーチのほか、司会も学生任せにして、内容の自由な講演型の「ショート・スピーチ」をさせるのもいいと思います。こういう活動なら、「日本文化の強要」にはならず、待遇表現を使用する環境を与えられます。
- ◇最近、留学生を連れて東京都下の小学校へ見学に行きました。特に学力レベルが高いわけでもない、普通の地区の学校です。それでも、交流会の司会をしてくれた6年生の女の子は、尊敬語・謙譲語・丁寧語の入ったスピーチで歓迎のあいさつをしてくれました。つまり、現代の小中学生でも人の前できちんとしたあいさつをしようと思ったら、「みんなで楽しみにしておりました」くらいの敬語（[敬語形でない動詞+デスマス]を0レベルとしたときの+1レベル程度）は使えるのです。社会人はもちろんのこと、高校生でもこの程度の敬語は使えないと小学生以下ということになります。つまり、基本的な敬語表現は、「人前できちんとあいさつができ、司会の進行ができる」程度で十分かと思います。ただ、「家庭や職場の環境によって（世代によっても）違う」待遇表現のパラエティを知る努力を、日本語母語話者教師は続けるべきでしょう。なお、「日本語を押し付けられた」と思われたいためには、いま教えている日本語が「共通日本語」という名の一種の方言（お友だちの言う「関東弁」の实体）であり、「日本語」の実態はもっとパラエティに富んでいて、教室で教えさるものではないということ、常に学生に断っておく必要があります。

以上、待遇表現指導上の問題に関する記述を見てきたが、前2章で紹介した記述から予測されたように、日本人教師の待遇表現についての知識や意識化の不十分さ・不徹底さが観察された。まず、待遇表現の体系を把握しきれていないことから、「敬語をいつから、

どこまで」教えるかについて明確なイメージが持てないことがあげられる。そのことは、また、どのようにして自然な学習環境を作るかという問題に解答を見出すことをも難しくしている。世界の言語における待遇表現の普遍性に気づかなければ、日本語の敬語は非常に特殊なものに思えてしまうし、そのような理不尽に難しい言語規則を「押し付ける」のをためらってしまうというように、明確な指導理念を持てないまま、なんとなく待遇表現指導に自信を失ってしまうのである。ここでも、日本人教師が待遇表現に関する包括的な知識を得ることの必要性が示唆されている。有効な指導法も、教授法一般についての見識とともに、そのような言語学的知識を持つてはじめて生み出せるのではないだろうか。

4. まとめと残された問題

以上、台湾の研修会における「事前課題」の日本人教師の記述から、日本語母語話者の教師が海外における待遇表現指導において直面する問題点を析出してみた。3章にわたる分析の結果をまとめてみると次のようになる。

まず、「1. 日本語の待遇表現に関する話題」では、日本語母語話者といえども、社会各層での待遇表現の実態を常に把握しているわけでも、「狭義の敬語」に捉われずそれを分析できる枠組みを持っているわけでもないこと、したがって、「こんなときどう言うか」「この言い方とあれとはどう違うか」に即座に答えられないでいることが明らかになった。続いて、「2. 台湾人学習者の日本語待遇表現使用・意識に関する話題」では、やはり、待遇表現の体系に対する知識不足、特に談話レベルの待遇表現やスピーチ・スタイルに対する意識化の不徹底のために、学生の疑問・要望にうまく対応できていないことが見えている。最後に「3. 待遇表現指導上の問題に関する話題」では、1・2章で見たこのような知識不足や意識化の不十分さが、確固とした指導理念の形成を阻んでいることが見て取れた。

すなわち、日本人教師も、複雑な待遇表現の体系の知識については、自分の第一言語といえども自然に身につくものではないこと、したがって、教師養成や再研修においては、待遇表現の実態把握の努力、外国語との対照から見るとその普遍性と特殊性への洞察、教授法知識の待遇表現指導への応用試行など、集中した「待遇表現意識化」の訓練が必要になってくるであろうことが結論付けられる。このような訓練をどのような教材とカリキュラムで行うべきか、それが日本語教育と待遇表現研究をともに専門に持つ、本稿の筆者のような研究者に課せられた課題であると認識しなければならないだろう。

今回のデータ分析は、台湾在住のわずか10名の日本語母語話者教師について行われたもので、量的には不十分である。しかし、そうであろうとも、少なくともこの10名の教師にとっては、あるいは個別の問題はそのうちの一人にとっては、身に迫った問題なのである。日本語母語話者の日本語教師が、自分の第一言語に関することのどこで悩んでいるか、その具体的記述を機会あるごとに収集していくよう心がけていきたい。

[参考文献]

- 蒔谷 宏／川口義一／坂本 恵 (1998)『敬語表現』大修館書店
 川口義一 (2002a)「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析 (1)—」『紀要』15号 早稲田大学日本語研究教育センター
 川口義一 (2002b)「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析 (2)—」『講座日本語教育』第38分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
 川口義一 (2003)「海外における待遇表現教育の問題点—台湾での研修会における「事前課題」分析 (3)—」『紀要』16号 早稲田大学日本語研究教育センター
 金 鐘完 (2003)「日本語の「普通体」と韓国語の「バンマル」の言語形式の対象研究—友人同士の談話分析を中心に—」(修士論文・未公開) 早稲田大学大学院日本語教育研究科
 細川英雄 (1999)『日本語教育と日本事情—異文化を超える—』明石書店

注

- i この研修会および「事前課題」については、川口義一 (2002a) pp. 15-16 参照。
 ii 記述の引用は、前3編と同様、書かれたとおりではなく、本稿の筆者が読みやすくまとめたものである。
 iii これらの記号は、各項目を書いた教師の勤務先を表すものである。中黒の前が研修会会場の所在地 (北=台北・中=台中・高=高雄)、後が勤務機関の種類 (高=高等教育機関・中=高等学校・初中=中学校・補=受験予備校・中/補=中学校と受験予備校兼任) である。なお、詳細については、川口義一 (2002a) p. 27 の注3) 参照。
 iv 蒔谷他 (1998) における依頼表現の「文話」構成 (同書 pp. 140-141) を参考にして書いたものである。
 v 蒔谷他 (1998) 「1.2「丁寧さ」の原理」(pp. 121-124) 参照。
 vi 同様のスピーチ・スタイルに関する問題点が台湾人教師からも出されている。川口 (2002b) pp. 9-11 参照。
 vii 金 (2003) pp. 35-38 に日本語の「普通体」における発音の位置付けが扱われている。
 viii 毎週行う文法や漢字のテストの最高得点者を「チャンピオン」と称して、クラスの前でお礼や抱負の入ったスピーチをさせる教室活動。1学期 15週の間が進むごとに表現が丁寧に、かつ長くなっていくように作られていて、13週までには、尊敬語・謙譲語・丁寧語が入った、デゴザイマス文体の丁寧なスピーチ・スタイルが使えるようになる。7週目くらいから、チャンピオンの紹介とチャンピオンに対する質疑応答を司る司会役を登場させ、テストの得点が高くなくても、司会としてクラスの前で丁寧なスピーチができるように指導する。本稿の筆者が考案し、少しずつ改良を加えながら実践しているもので、初級の学習者同士でも敬語表現を使うことになる、自然な文脈を提供できる。
 ix 尊敬語・謙譲語・丁寧語など個々の敬語の正確な形式を学習者に注意させるほか、[あいさつ→自己紹介→チャンピオンにさせてもらったことに対するお礼→今後の抱負→「よろしく」→締めくくりのお礼] という談話構成であることにも意識を向けさせる。
 x 自己の文化を相対化できない日本人の「[典型的な日本人] 幻想」については、細川 (1999) pp. 203-210、およびその前後の議論を参照されたい。